

自画像の丸山眞男―対話的人間のすがた―

東京女子大学丸山眞男文庫顧問・前国際基督教大学教授 松 沢 弘 陽

三、四、五月、三回にわたって表題のような読書会を行いました。講師役をつとめた私が、とくに丸山眞男の学問や思想をこれから知りたいとお考えの方にご紹介したいと願ったのは、丸山という人の会話の楽しさ、溢れるような豊かさでした。

丸山を知るのに、彼が自らを語った文章は格好の素材です。私は、こうして選んだ「自画像」的文章を楽しみうちにそれが、丸山の世界への導入としてうってつけであるだけでなく、そこに浮かび上がって来る丸山という人の本質的な対話性は、彼の学問や政治観など全ての根底にあり、それを理解する鍵だと思ようになりました。

丸山が遺した自画像的文章は、それぞれ自己を語って興味深いだけでなく、彼の時代についての証言としての価値も高いものです。理由の一つは、これらの文章が、自己満足的なただらした思い出話ではなく、つねに、なぜ何のために語るのか、はっきり意識されていることにあるでしょう。後になるほど、自分とその時代に貼りつけられる

誤ったイメージを正すポレミックの性格が強くなり、語りの焦点と輪郭がくつきりとして来、史料としての価値がそれだけ増して来ます。

その丸山の自己認識の一つに、「おしゃべり」があります。彼は桑原武夫・森有正両大人とともに「日本の三大おしゃべり」という尊称(?)を奉られていましたが、あえて反論はしていません。丸山が生来おしゃべりだったのか私にはよくわかりません。私の関心を惹くのは、彼が、おしゃべりを楽しみながらそのことの意味を引き出し、人間にとって対話という営みがどんなに大きい意味を持つか考えていったように思われることです。

私は、丸山の自画像的な文章をとり上げる中で、対話を楽しむというこの意味を考えるように促され、対話にふれる古典に目を開かれたりしながら、対話ということがらを切り口にして丸山眞男の世界の奥の方へと導かれてゆきました。私のお話に対する質問やコメントも私を対話に引き入れました。会場でよくお答え出来なかった分は、私

の心の中にとどまって、答えを促し続け、私の考えを発展させました。私のお話は、よく練った構想に従って整然と語るといふ風にはまいませんでしたが、丸山と対話し、参加なさった方々と対話する中で考えを深めることが出来、その意味では大変楽しく、また勉強になったことを感謝しています。

*

「対話」ということばはすっかり手垢がついてしまいました。ひとの不満に捌け口を与える「ガス抜き」行為をさすまでに成り下がった感があります。しかし丸山にとって対話は、本来、何か他の目的のため的手段ではなく、それを楽しむこと自体に大きな価値がありました。彼にとって対話は、人間の文化のエッセンスを意味したといえるでしょう。彼の三十代の傑作「福澤論吉の哲学」が、G・ジンメルの珠玉篇『社会学の根本問題』の「社交」の章によって結ばれていることや、彼のエッセイの中で社交の意味にふれているのはそのことを示しています。学問や政治の世界における、問題の探究や解決の手段としての討論は、こうした日常の場での会話と社交の質を高めてこそはじめて可能になる、というのが彼の考えでした。

対話が成立つには、さまざまな差異を背負った人間が、互いに同じ立場で加わるといふことが条件になります。丸山が「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」(『歎異抄』)をもじって「眞勇は弟子一人ももたず

さふらふ」と笑ったのは、そのような機微についての彼の信念を現しているように思います。

しかし同じ立場で会話に加わったとしても、語ることによって他者を楽しませる力は同じとは限りません。丸山がしゃべり出すと、皆聞き入ってしまい、彼の「独演」に終わることが珍しくありませんでした。親友の内田義彦から「君は絶対に第二ヴァイオリンを弾けない男だ」というきつい批判を受けたことを丸山自身語っています。

けれども丸山は、対話を成立たすための難しい壁を越えることが出来ました。それは彼が、対話の重要な一しかし忘れられること実に多い一面である、聞くことに熱心ですぐれていたからのように思われます。彼はある時期から人と人との交わりにおける他者性ということを強調し、同時に、他者を他者として受けとめた上でその人を内側から理解する「知的好奇心」の意味を力説するようになりました。私には丸山のいう「知的好奇心」は時に、他者の運命が深く心にかかるということも含んでいたように思われます。いずれにせよ丸山は、ごく自然にある種の聞き上手 *good listener* でした。そして彼の関心と問いは、彼の著書のタイトルをかりれば、「後衛の位置」を選ぼうとする者として、まちがいがなく「後衛」の人々にも向けられていました。

丸山はよくしゃべりました。そのおしゃべりには独演的に語りかけるだけではなく、熱心に問い耳を傾けることも含まれていました。そして彼は、聞いたことがらを自分自身の問題に照らして深く受けとめ、それに応答しました。さまざまな形で遺されている彼の自画像的な文

章のいくつかは、そのような応答の深い形を示しています。

「セクター」設立と読書会開催のための御愛労に感謝して。

〔『東京女子大学学報』五七二号、二〇〇二年七月号所収〕